

サハリンプロジェクトを核に 交流が進む稚内とロシア

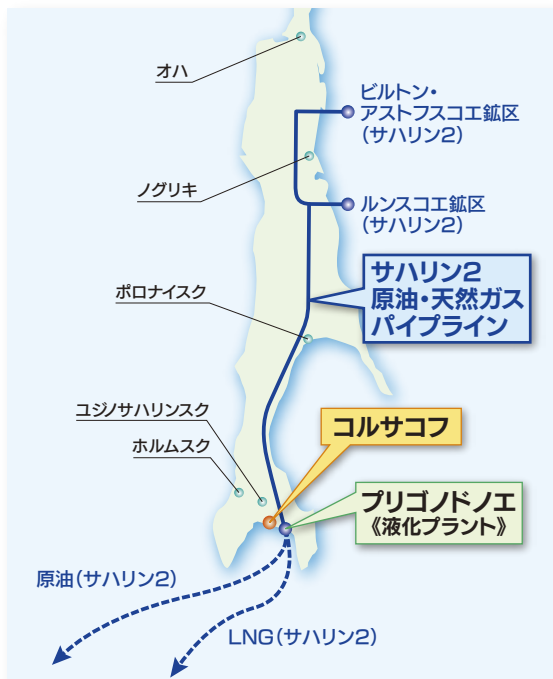
ロシアサハリン州沖の大陸棚に眠る豊富な石油・天然ガス資源を、ロシア政府と大手石油企業が共同で開発する「サハリンプロジェクト」。資源開発に関連した様々な工事や付随する社会資本の整備、物資や人口の集中が進むことでビジネスチャンスの拡大が見込まれている。このプロジェクトに日ロ合弁企業を立ち上げて参入した稚内建設協会の一員である株式会社富田組の代表取締役社長、富田伸司さんに稚内が果たす役割について語っていただいた。



株式会社富田組 代表取締役社長
富田 伸司

行政と民間が共同で進めた日ロの人的 交流が合弁企業の設立につながった

サハリンの南端にあるコルサコフ港は稚内からフェリーで159kmの距離にある。道内で言えば国道40号で美深付近まで南下するのと同じ距離となり、稚内から見れば旭川よりロシアのほうが距離の上では近いことになる。



「稚内市は1972年にサハリンのネベリスク市と友好都市の締結を行うなど、古くからロシアと交流を深めてきました。建設業としてはペレストロイカ[※]以降徐々にサハリンへの訪問を行うなどの動きがありましたが、本格的な交流は1994年に稚内商工会議所が始めたロシア人研修生の受け入れ事業がきっかけです。研修生の約4割が建築関係で、弊社でも過去7名の研修生を受け入れてきました」

その後1999年に稚内建設協会として正式にサハリンを視察、目前に迫っていた大陸棚の石油・天然ガスの開発プロジェクトを知り参入のチャンスを窺うことになる。

「結局、参入には現地の建設会社と手を組むのが現実的だという結論に達し、2000年に正式に合弁の相手探しを始めました。稚内市の現地事務所にもお世話になりましたが、何より役にたったのが過去に受け入れたロシア人研修生のコネクションでした。最終的にコルサコフ市の行政サイドのバックアップもあり、2001年8月に現地会社と稚内建設協会の合弁会社「ワッコール」を設立しました。出資比率は現地会社と公社で6、我々が4となり、ロシア企業として現地で登記しています」

[※]ペレストロイカ：1980年代後半からソビエト連邦で進められた政治体制の改革運動。ロシア語で「改革（再構築）」を意味する

ワッコルが参入したのは「サハリン2」という天然ガス系のプロジェクト。サハリン北部で採掘したガスをパイプラインで南部のコルサコフ郊外まで運び、プラントで液化後LNGタンカーで運び出すというもの。石油大手のロイヤル・ダッチ・シェルを中心に三井物産と三菱商事が出資する「サハリンエナジー」を事業主体とし、2007年から東京ガスや東京電力への供給が決まっている。ワッコルはこの天然ガス液化プラントの建設を受注した日本の大手ゼネコンと契約を結んでいる。

「このプロジェクトには“ローカルコンテンツ”といって、ロシア国内の企業や製品を優先的に使う取り決めがあります。ゼネコン側としては事情のわからない現地企業と手を組むよりは、日本の企業が関係しているワッコルと組むほうが安心だと考えたのでしょう。とはいえ設立したばかりのワッコルは社長も職員もロシア人ばかりでした。日本の大企業と日本式の施工方法で作業を進めなければならないため、稚内から技術アドバイザーを派遣して万全を期しました」

“ロシア流”を目の当たりにして 改めて日本人の気質と技術を見直す

富田さんにはサハリンで目にして強く印象に残った光景がある。プロジェクトに関連して急速に整備が進む幹線道路で改修工事後の現場を通りかかった時のこと。3段ほどあった切土法面が裸地状態のまままで放置され、風化によって崩れ落ちた小石が端に溜まったままになっていた。予算不足なのかロシア人の気質なのか、それとも法面整形という概念すら無いのか、日本では考えられない光景に驚いた。

「ロシア人は個人的につきあうと非常に友好的ですが、対行政・対企業となると社会主義時代の名残なのか、とたんに効率が悪くなってしまう傾向にあります。また、プライドが高いのか“できない”とか“無い”という返事は聞いたことがありません。例えば“○○という機械はあるか？”と聞くと“ある”と答えるものの、実際にその機械を見に行くとボロボロで使い物にならなかつたりします」

この他、班分けをして作業を進める場合に忙しくて手が足りなくなった班があっても他の班が手伝おうとしなかつたり、休憩時間がくればあと一息で作業が一段落しそうな時でもスパッと止めてしまったりと、改めて日本人の勤勉さを感じたようだ。

「技術面で大変だったのは、日本では現場でコン



ワッコル施工「パイプラック基礎」

パネとセパレーターを使ってコンクリートを流し込む作業を当然のように行っていますが、ロシアでは厚めの板を外側から切りばりで押さえるという方法を取っていたため、全てを一から教えなければならなかった点です。同じ寒冷地での作業という意味で現地の技術者から我々に積極的に教えを請う場面もあり、今では大体のことは覚えたようです」

稚内とサハリンの将来に ワッコルが果たす役割とは

技術アドバイザーの派遣が中心では貴重なノウハウが流出するばかりで、ビッグプロジェクトへの参加という実績以外に稚内側にメリットはないのではないだろうか。

「私たちの理想は稚内がサハリンへの玄関口として大いに活用され発展していくことです。そのためには稚内～サハリン間を年間60往復運航している定期フェリーを今後も継続していく必要があります。ワッコルがサハリン2に多少なりとも関わったことで、稚内経由で人やモノ、特に建築機械や資材が定期フェリーでサハリンに運ばれていきました。まだ十分に活用できている状況ではありませんが、若干でも貢献できたことは大きいと思っています。

現在のプロジェクトは2007年中に大規模な投資が一段落する予定ですが、その後もサハリン5などの計画は存在しています。また先方に期待するばかりでなく、稚内市としても宗谷岬ウインドファームだけでなく目の前の天然ガスを有効に活用して、新しいエネルギーの街として発展していければ良いなと思っています」